

作者名 Parade556

タイトル

噛ませ犬

【人物一覧表】

望田安次（31）（29）	プロボクサー
望田佳次（11）（9）	望田の息子（小学生）
望田つばき（29）	望田の妻
井田すみれ（26）（24）	つばきの妹
安部一也（27）	プロボクサー
小浦幸助（54）	小浦ジム会長
安部一郎（50）	トレーナー（一也の父親）
カラエフ（31）	プロボクサー（一也の対戦相手。ウクライナ人）
古賀大彌（11）	佳次の同級生
馬場輪弩（11）	佳次の同級生
アーケード街・商店街の店員たち	
佳次の同級生、体育の教師	
すみれの元会社の同僚たち	
一也の試合に集まるファン	
望田の対戦相手のボクサー	
輪弩と大彌の両親	

【あらすじ】

ボクシング世界チャンピオンのスパーリングパートナー望田と、息子・佳次の話。

タイトルマッチ直前、スパーリングで世界チャンプの一也からダウンさせられた望田の映像が、朝の情報番組のスポーツコーナーで流れる。佳次は、学校で同級生から「噛ませ犬」とからかわれる。佳次は、彼らを見返すためにボクシングをやりたいが、望田が認めてくれない。

望田には、2年前、ガンで亡くした妻・つばきがいて、つばきの妹・すみれが今は望田親子と一緒に暮らしている。

ジムでは、会長の小浦、一也の父親でトレーナーの安部が見守る中、一也と望田は順調な調整をしている。

一方、同級生からかわれた佳次は、同級生に殴りかかってしまい、すみれが呼び出されることに。

望田は、学校から帰ってきた佳次を叱る。

佳次は、ボクシングをやらせてくれと頼むが、望田は拒否。

望田はひとり酒を飲みに出かけるも、結局、川原でシャドーボクシングに明け暮れ、つばきが余命いくばくもない頃のことを思い出し、涙する。

タイトルマッチは、無事、一也の勝利で終わる。

小浦から、試合をしないかと言われる望田。迷うが、佳次の後押しもありリングに上がることに。

一也と父親の安部との口喧嘩を目撃した望田。安部と二人きりになった時、佳次にボクシングをさせないのは、生前、つばきから「ボクシングをやらせないでくれ」と言われたからだと告げる。

佳次は、学校で同級生から弱虫とからかわれ、勇気があるならベランダ（3階）から飛び降りてみると言われ、飛び降りる。寸での所で、望田に救われるが、望田は腕を骨折。

試合は中止に。

涙ながらに謝罪する佳次。しかし望田は、試合ができなくなって安心したこと、そしてつばきが亡くなることを知りながら、佳次に告げなかったことを謝る。

佳次は、いつも一生懸命な父親が大好きで、尊敬していると告げる。

望田は、つばきとの約束を破り、佳次にボクシングをやらせる決断をする。

○商店街（朝）

アーケード街。

八百屋やパン屋、クリーニング屋などが営業の準備をしている。

望田安次（31）、トレーニングウェアで通りの向こうから走ってくる。

八百屋から店員が顔を出し、

店員A「ヤス。試合、頑張れよ」

望田「ありがとう」

クリーニング屋から店員が顔を出し、パンチを撃つ真似をして、

店員B「負けんなよ。ヤス」

望田「ありがとう」

あちこちのお店に、フェザー級4団体世界統一戦のポスターが貼られている。

場所は有明コロシアム。

フェザー級WBA、WBC、WBOの

世界チャンピオン安部一也（27）と、

フェザー級IBFの世界チャンピオン、ルスラン・カラエフ（31）との対戦。

望田、その後も店の店員から声をかけられる。まるで望田自身が試合をするかのように。

○商店街のそばにある川原（朝）

望田、シャドーボクシング。

サウスポースタイル。

土手においたスマホには、カラエフの試合映像が映っている。

カラエフもサウスポースタイル。

○川原と試合映像が重なる（朝）

シャドーをする望田と、試合をするカラエフの姿が重なる。

リズムの取り方、ステップの踏み方、パンチを出すタイミング、テンポ、角度、二人はそっくりである。

○くるみ荘・全景（朝）

木造の2階建てアパート。

ニュースキャスターの声「それではスポーツ」

○同・201号室（望田家）・リビング（朝）

望田佳次（二）、パジャマ姿でテレビの
前に座っている。

テレビ台の横に、望田つばき（29）の
遺影と位牌が置かれている。

ニュースキャスターの声「まずはボクシング。
フェザー級4団体世界統一戦に向けて、安
部一也選手が、順調な仕上がりを見せてい
ます」

テレビに映り込む小浦ジムのリング。
スパarringをする一也と望田。

望田が左フックを放つ。一也のカウン
ターの左フックが望田の頬に当たり、
望田、ダウン。

佳次「あ。パパ」

映像切り替わり、一也のインタビュー。

T・「世界戦に向けての意気込み」

一也「調子は、ばっちりですね」

記者（声）「死角はなしですか？」

一也「はい。コンディション的には、たぶん、

今までで一番……」

佳次、テレビの電源を消す。

佳次「クソっ」

井田すみれ（26）、エプロン姿で、玄関

ドアを開けて入ってくる。

すみれ「ヨシ君、ごめん。ゴミ置き場にカラスいて。それがすんごいおっきいの」

佳次「（テレビを見つめたまま）」

すみれ「どうしたの？」

佳次「……おはよ」

すみれ「おはよ。すぐご飯にするね」

佳次「いない」

すみれ「学校で元気でないよ」

佳次「食べても元気にならない」

すみれ「テレビ……兄さん映った？」

佳次「……」

すみれ「兄さんは……」

佳次「どうして、パパは僕にボクシングやら

せてくれないの」

すみれ「ヨシ君」

佳次「ぼく、誰よりも強くなるよ。強くなつて、パパのことバカにしてる奴ら、みんな殴り倒してやるよ」

すみれ「あのね、兄さんは…」

佳次「すみれちゃんには関係ないでしょ」

すみれ「ヨシ君」

佳次「ぼくらの家族じゃないんだし」

テレビ台の横に、つばきの遺影。写真に写るつばきは満面の笑顔。

佳次、ずっとすみれに背中を向けている。つばきの遺影を見ているわけではない。真っ暗になったブラウン管を睨みつけている。

すみれ「そうだね。ごめん」

すみれ、寂しそうに笑う。

佳次「カッコ悪いよ。パパ」

すみれ「ヨシ君」

佳次「いっつも、やられてばっかで」

すみれ、何か言いかけるが言わない。

佳次「ぼくはやられない。絶対。誰にも」

すみれ「ご飯にしよう。今、準備する」

佳次「だから、いらないうってば」

すみれ、台所で準備をはじめ。

○同・台所（朝）

パジャマから外出着に着替えた佳次、

食べ終えた食器を流しに置く。

佳次「ごちそう様でした」

すみれ「はい」

すみれも、自分の食器を流しに置く。

佳次、リビングに向かう。

○同・リビング（朝）

佳次、つばきの遺影の前で正座。

佳次「ママ。おはよう。学校、行ってくるね」

つばきの笑顔の写真を笑顔で見る佳次。

○同・台所（朝）

佳次の後ろ姿を見るすみれ。

佳次、立ちあがると傍にあるランドセルを取り玄関へ。

佳次、靴を履くと振り向かずに出ていく。

佳次「いってきます」

すみれ「いってらっしゃい」

ドアが閉まる。

すみれ、リビングへ。

○同・リビング（朝）

すみれ、つばきにご飯を出していないか
ったことに気づく。

すみれ「（遺影に向かって）あ、ごめん。お姉
ちゃんのご飯だすの忘れてた」

すみれ、台所へ戻っていく。

○佳次の学校への通学路（朝）

佳次、ランドセルを背負い、うつむき
がちに歩いている。

ランドセルを背負った児童たちが歩いている。その中に古賀大彌（二）と馬場輪弩（二）。佳次に気づくと二人、ニヤリと笑い、佳次を追い抜きざま、

大彌「よわっ」

輪弩「オマエの父ちゃん、よわ」

佳次、大彌たちを睨む。

大彌・輪弩「嚙ませ犬う」

大彌と輪弩、走り去っていく。

佳次、ランドセルの肩ひもを持つ手を強める。

佳次「絶対、みんなやつつけてやる」

○望田の自宅・玄関・内（朝）

望田、帰宅。

すみれ、洗い物をしている。

望田「ただいま」

望田、靴を脱ぎ、部屋にあがる。

すみれ「あ、兄さん。お帰りなさい」

望田「ヨシ。行った？学校」

すみれ「うん」

すみれ、洗い物をしている手を止める。

望田「どうしたの？」

すみれ「見ちゃったみたい」

望田「カズとのスパー？」

すみれ「うん」

望田「いや、ほんと良い左フックだったよ」

望田、一也のフックを再現し、嬉しそうに笑う。

うに笑う。

すみれ、笑おうとするも上手く笑えない。

い。

望田「ヨシの気持ちはわかってるよ」

すみれ「ボクシングやりたいてって」

望田「うん。でも、今のマインドじゃダメだ」

すみれ「兄さん」

望田「ボクシングは、人を傷つける道具じゃない」

ない」

すみれ「兄さんがやられちゃうのが嫌みたい」

望田「やられるつもりはないんだけどね」

すみれ「…」

望田「一也は、世界一のボクサーだよ。パワーだけじゃない。スピードも、間の取り方も、アイツは、完璧なボクサーなんだ」

すみれ「…」

望田「アイツのスパarringパートナーができて、俺は幸せだよ」

すみれ「うん。でもね」

望田「ヨシが俺の仕事が嫌なのはわかってる」

すみれ「兄さんは、もう試合には出ないの？」

望田「俺が？自分の試合ってこと？」

すみれ「うん。だってまだ引退してないんでしょ」

望田「考えたことないな」

すみれ「もしかしたら、それでヨシ君の気持ちも変わるかもしれない」

望田「今、俺、すごく充実してるんだ。自分のためじゃなくて、一也のために、ジムのために働いていることが」

すみれ「そうなんだ」

望田「自分のために戦ってた時の何十倍もね」

すみれ「兄さんが羨ましい」

望田「すみれちゃん」

すみれ「ヨシくんには、私みたいな思いしてほしくない」

○（回想）すみれの会社

スーツ姿の井田すみれ（24）、上司らしき女性から、みんなの前で怒られている。嘲笑う同僚たち。

○元の部屋（朝）

すみれ、呼吸が荒くなり立っていられなくなる。

望田、すみれを介抱する。

望田「すみれちゃん。大丈夫」

すみれ「…」

望田「ゆっくり、ゆっくり呼吸して」

すみれ、望田に言われるまま呼吸。

望田「ゆっくり息を吸って、ゆっくり吐いて」

すみれ、大分落ち着いてくる。

望田「ゆっくり吐いて。ゆっくり」

すみれ「：うん。もう、大丈夫」

望田「無理しないで。立たない方がよいよ」

すみれ「大丈夫」

× × ×

望田とすみれ、台所の戸棚に背中をつ

けて座っている。

すみれ「ほんと、自分が嫌になる。弱すぎて」

望田「自分のこと、悪く言わないの」

すみれ「兄さんやヨシくんみたいになりたい」

望田「俺とかヨシに？」

すみれ「強い人。私みたいな弱虫じゃなくて」

望田「一也と同じこと言ってるな」

すみれ「え？」

望田「アイツも、自分のこと弱虫だって」

すみれ「世界チャンピオンなのに？」

望田「アイツは誰よりも臆病だよ。だから誰

よりも練習する。そのおかげで試合に勝つ

んだ。でも、強いわけじゃない。近くに

て、アイツが自分のことを弱虫だって言う

理由がわかるよ」

すみれ「信じられない」

望田「強いから、俺は弱かったのかな。リングでも、油断して（自分の顔に拳を向けて）、やられることが多かっただろ？」

すみれ「兄さんは弱くないよ」

望田「ボクシングはさ、ただ強いだけじゃ続けられない。勝たないと」

すみれ「ヨシ君も、きっと強いよ。強くて強いと思う」

望田「それじゃ、ダメなんだ」

すみれ「え？」

望田「弱くて強いのが良い」

すみれ「一也さんみたいに？」

望田「そう。もしそれがダメなら、強くて弱い方が良い。俺みたいに」

すみれ「強くて強かったら。チャンピオンになれないの？」

望田「なれるさ。でも、それじゃ孤独になるだけだ。そういうボクサーにはなってほし

くない」

すみれ「：ごめんなさい。わかんない、難しくて」

望田「ごめん。俺がうまく説明できてないだけだよ」

すみれ「私がバカだから」

望田「ほら、自分、傷つけない」

すみれ「でも、でもね、ヨシ君も、きっとそうだと思う。自分のこと、傷つけてる」

望田「今のヨシじゃダメだ」

すみれ「じゃあ、どうなったらいいの？」

○（回想）つばきの入院している病院・病室

T・「2年前」

ベッドにいるつばき。その横にある椅子

子に座っている望田安次（29）。

望田、つばきの手を握り、今にも泣き出しそうな顔。

つばき、笑顔で望田を見ると何か喋り出す。

望田、その話を聞いてハッとなる。

○元の部屋（朝）

望田とすみれ、並んで座っている。

望田「…どうなっても、ダメだよ」

すみれ「それじゃ、ヨシ君が可哀そうだよ」

望田「え？」

すみれ「ごめんなさい。私なんかが口出しして」

望田「何言ってるの。すみれちゃんは家族じゃないか。ぼくらの」

すみれ「…」

望田「ごめん。やめよう。今は。この話」

すみれ「兄さん。私ね、そろそろ出ていこう
と思ってる」

望田「どうして？」

すみれ「…」

望田「俺は、ずっといてくれたって良いと思
ってる」

すみれ「うん。でもね…」

望田「決めるのはすみれちゃんだから」

すみれ「うん」

望田「でもね、もし、この家を出るんだって、すみれちゃんあのタイミングで、本当に自分が次のステージに行けるってなった時でいいんだから。ね」

すみれ「ごめんなさい」

望田「ありがとうでいいの。そういう時は」

すみれ「はい」

望田「うん」

望田、つばきの遺影に視線が行く。

すみれ、望田の視線を追い、つばきの遺影を見る。

○小浦ジム・全景

○同・室内

一也、サウナスーツを着てサウナ室に向かう。

その姿を見送る安部一郎（50）。

望田、入室。

安部「おお。ヤス。おはよう」

望田「おはようございます。どうです？ カズは」

安部「うん。ちょっと体重落ちてない」

望田「フェザー、きつくなってきましたね」

安部「うん。そろそろ限界かもね」

望田「スパーフェザーか」

安部「あんまり想像したくないけどね。ヤバい奴ばっかだから」

二人、顔を見合わせて笑う。

小浦幸助（24）、入室。

小浦「ヤス」

望田「あ、おはようございます会長」

小浦「ちよっといいか？ コーさんも」

望田「はい」

安部「はい」

小浦につづいて歩いていく望田と安部。

○同・会長室

望田、小浦と安部と並んで対戦相手の
試合映像を見ている。

カラエフが左フックを放ったところで、
ビデオを一時停止。

小浦「左の返し（左フックのフォーム）、この
軌道なんだけどさ」

望田「はい」

望田、立ちあがるとスローモーション
で左フックを放つ。

安部「もう少し、外から回ってくる感じかな」

小浦「そう。顎の位置も低くて」

望田、真似をする。

小浦「そう。そんな感じ」

安部「ウイラポンぽいな」

望田「あ、こんな感じですか」

望田、ウイラポンのフックのモーション
を真似る。

安部「そう。肘の使い方とかさ」

小浦「マーフィーじゃない。どっちかと言っ
たら」

望田「マーフィーのフックのモーショ
ンを真似る。」

小浦・安部「ソレだ」

小浦と安部、お互い、顔を見合わせて
笑う。

望田「シンクロ」

小浦「いやいや、見事だからさ」

安部「ほんと、カズが世界チャンピオンにな
ったのはヤスのおかげだよ」

望田「何言ってるんですか」

安部「こんな真似の上手いボクサー、他にい
ないよ」

小浦「そうそう。事前に何回も戦ってるよう
なもんだ」

望田「褒めてませんって、ソレ」

小浦「いや、褒めてる褒めてる」

安部「前々から聞いてみたかったんだけど、
どうしてこんな上手くできるの？」

望田「相手のビデオ見て、動き真似してるだ
けなんですけどね」

小浦・安部「天才」

望田「またシンクロ」

小浦「頭と身体のコネクトがすごいんだな」

安部「なかなかいいですよ。カズも、全然できないもん」

小浦「アイツ、器用じゃないしな」

望田「カズは、普通なら根を上げるレベルの練習を、繰り返し繰り返しできるのがすごいです。アイツこそ、天才ですよ」

小浦「我慢の天才だね。オヤジさんの教育の賜物だ」

安部「いやいや、どうも」

3人、顔を見合わせて笑う。

○佳次の小学校・校庭

体育の時間。

体力測定。

50m走。

大彌、輪弩と佳次が走る。

佳次がダントツの一位。

× × ×

ソフトボール投げ。反復横跳び、走り幅跳び、垂直ジャンプ、すべて佳次が一位。

佳次がパフォーマンスをするたびに、同級生たちから歓声上がる。

特に女子たちから黄色い歓声。

佳次、興味なさそう。

佳次を嫉妬深い目で見る大彌と輪弩。

○同・下駄箱

体育の授業終わり。

佳次の後ろを歩く大彌と輪弩。

大彌「噛ませ犬のくせにすげえな」

輪弩「本物の犬だからじゃねえの」

佳次、拳を握りしめる。

女子A「噛ませ犬って何？」

大彌「噛ませ犬ってのはさ」

佳次、大彌の前に現れる。

大彌「な、なんだよ」

佳次、大彌に殴りかかる。

大彌「わあああ」

佳次、大彌の顔面すれすれでパンチを止める。

大彌、尻餅をついてしまう。

女子児童たちから悲鳴があがる。

体育教師が駆けつけてくる。

教師「どうした。な、何があった」

輪弩「ヨシが、大彌のこと殴った」

教師「え？ほんとにかヨシ」

佳次「…」

教師、尻餅をついている大彌の前にしやがみ込み、

教師「大彌、大丈夫か。大丈夫か」

大彌「殴られた。俺、今、コイツに殴られた」

教師「大彌を保健室に。ヨシ、俺と一緒に教

員室へ来い」

佳次「…」

教師「ヨシ」

大彌、輪弩達に抱えられながら保健室

へ。

佳次は教師と一緒に教員室へ向かう。

○小浦ジム・リング

望田、一也、リング上でマスボクシング。
グ。

リングサイドに小浦と安部。

リング上、カラエフの左フックの所で、

望田と一也、動きを止める。

一也「角度、こんな感じっスか？」

望田「ちよっと外回りする感じ」

一也「コレ、頭の位置によつてはちよっと危ないかも」

望田、フックのフォームから元に戻す。

安部「コンビネーションに組み込んでくるか

ら。必ず」

一也「今まではね。これから…の保証ないでしょ」

安部「…」

望田「たぶん、単発では打ちにくい」

一也「マジっスか」

望田「右の肩を引き気味にして下げないと打てないからさ。コレ、カズにできるボクサーいる？」

望田、フックのフォームをスローモーションで行う。

一也「たぶん、かましちゃう」

一也、カウンターの打ち下ろしのフックを望田の頬の前で止める。

二人、その角度で笑い合う。

小浦「カラエフ倒して4団体統一したら、スパーフェザー行こう」

望田と一也、モーションを解く。

一也「いきなりっスね」

小浦「いや、ずっと前から考えてた。コーさんと」

安部「うん。落とすの大分キツくなってきたろ」

一也「俺は、先のこと考えてないよ。今は、カラエフのことだけ。やめてよ、試合前に

次のこと話すの」

小浦「いや、すまん」

安部「うん。ごめん」

気まずい雰囲気。

○学校のそばの通り

すみれ、慌てた顔で走っている。

○同・教員室前の廊下

すみれ、体育教師に謝っている。

体育教師の隣にうなだれた佳次。

○学校から家までの帰り道

佳次、ランドセルを背負って歩いていく。
る。

佳次から少し離れ、後ろについて歩く
すみれ。

○小浦ジム・更衣室

望田と一也、着替えている。

一也「すいません。さっきは、なんか空気悪くしちゃって」

望田「カズは何も間違っていないよ」

一也「海外のオッズとかでも、俺が圧勝するみたいになってて、けっこうプレッシャーあつて」

望田「カラエフは弱くないよ」

一也「ですよね」

望田「アイツは左だけじゃない」

一也「そう。なんか、アイツとはリズム合わなくって」

自然とファイティングポーズで向き合

う望田と一也。

望田、仮想カラエフとしてステップを

刻みだす。

一也「なんか、入りにくいなあ」

望田「強引に行くのも怖いよな」

一也「目つぶって飛び込むようなもんですからね」

望田「リングに上がらない人間は、何とでも

言えるよ。俺も含めてな」

二人、フアイティングポーズをほどく。

一也「会長、元世界チャンプですけどね」

望田「今は、ジムの会長だからな」

一也「立場が人を変えるのか」

望田「日本のボクシング界で、カズほどのキ

ヤリアを踏んだ人はいない。だから、オマ

エしか見えてない景色があるんだよ」

一也「俺はただ、同じボクサーとして共感してほしいだけなんすけどね」

望田「そうか。そうだよな」

一也「ヤス兄みたいに」

望田「俺は、ただの8回戦ボクサーだよ」

一也「もう、試合しないんすか？」

望田「もう2年も試合してないんだぞ」

一也「いや、見たいですけどね」

望田「カズがセコンドついてくれるなら」

一也「誰にも渡しませんよ。その役目」

望田「それだけで客が来るな」

一也「まさか」

望田「帰るのか」

一也「帰ります。早く子供の顔みたいんで」

望田「瑠衣ちゃん。もう2歳か」

一也「癒しっスね。俺の人生で唯一の」

望田「癒しか」

一也「ヨシ、まだボクシングやらせないんですか？」

望田「うん。まだちょっとな」

一也「心配しすぎですって。最初はそんなもんでしたよ俺も。気に入らないヤツぶん殴ってやるくらいの」

望田「ほんとかよ」

一也「リング上がってるうちにわかるようになりますって」

望田「」

一也「ボクシングはただ殴って倒すだけのスポーツじゃないって」

望田「」

一也「最高の指導者が傍にいたんだから、道外すことなんかないですって」

○（回想）つばきの病院

つばきから何か言われている望田。

ハッとした顔をする望田。

一也（声）「ヤスさん？」

○元の更衣室

望田と一也、向かい合っている。

望田「あ、ああ。どうした？」

一也「じゃ、帰ります。ヨシのこと、俺、本
気ですからね。俺でよければいつでもコ
チしますんで」

望田「おいおい」

一也「アイツ、絶対才能ありますよ」

望田「ほんとかよ」

一也「お疲れっス」

望田「お疲れ」

一也、更衣室を出ていく。

望田、スマホを見る。すみれからL I

N E がきており、内容を見て愕然。

○望田家・リビング（夕方）

佳次、すみれが床に座っている。

望田、帰宅。すぐにリビングへ。

望田「ヨシ、何やってんだ」

すみれ「兄さん。やめて」

望田「友達を殴るなんて」

佳次「殴ってないよ」

すみれ「殴ってないの」

望田「殴ろうとしただけでもダメなんだ」

佳次「アイツが悪いんだ。アイツがいつも…」

望田「言い訳するな」

すみれ「兄さん。もうやめて。先生からも」

望田「ヨシ。仲間は守ってやらないとダメな

んだ」

佳次「アイツは仲間なんかじゃない。仲間じ

ゃないよ」

望田「同級生だろ」

佳次「ボクサーだって、敵同士で闘うじやな

いか」

望田「試合が終われば、敵じゃなくなる」

佳次「ボクシング、やりたい」

望田「ダメだ」

佳次「どうして」

望田「ボクシングは、相手を傷つけるスポーツじゃない」

佳次「殴り合うじゃないか」

望田「それは、ちゃんと練習している者同士だ。ヨシみたいに、ボクシングをやったことない子を殴ろうとしたりはしない」

佳次「…う。なんでいつもわかってくれないの」

佳次、泣き出してしまう。

すみれ、佳次を抱き寄せると、すみれ「兄さん。もう、やめて。お願いだから」

望田「すみれちゃん」

すみれ「家族じゃないのに、こんなこと言うてごめんなさい。でも、ヨシくんは、ボクシングやらせてあげてほしい」

望田「違うよソレは」

すみれ「兄さん」

望田「すみれちゃんは、家族だよ。俺たちの。

ヨシ、すみれちゃんになんか言ったのか」

すみれ「ヨシくんは何も言っていない。何も言っていないから」

佳次、泣いている。

すみれも泣き出す。

望田、その姿を見て、

望田「：ちよつと、外の空気吸ってくる」

望田、リビングを出ていく。

望田「先に、寝てていいから」

望田、靴を履いて玄関から出ていく。

○ 駅前の商店街（夜）

飲み屋。

望田、入ろうとするも一也の試合のポスターを見て止める。

○ 川原（夜）

望田、一人シャドーボクシング。

○（回想）つばきの病院

ベッドで寝ているつばき。

その横に座る望田。

望田、つばきの手を握り泣きだす。

つばき「あと3ヶ月って：映画みたい」

望田「すまん。どうしたらいいかわからない」

つばき「うん。ごめんね。こんなダメな身体で」

望田「（首を横に振り）何言ってるんだよ。何言ってるんだ」

つばき「ヤス君」

望田「クソっ、なんでつばきがこんな目に合わないといけないんだ。クソ。クソっ」

つばき「不思議なの」

望田「え？」

つばき「死ぬのは、怖くない」

望田「：」

つばき「でも、あの子のことだけが心配。ヨシを、残していくこと」

望田「つばき」

つばき「ヨシには、言ってくれた？病気のこ
と」

望田「ごめん。ごめん。まだ、言えてない」

つばき「私も。なんかあの子の顔見てたら、
言えなくって」

つばき、笑う。

望田「どうしたらいいかわからないんだ」

つばき、うつむく。

望田「どうしたらいいんだ。俺、どうしたら」

つばき「ごめん：ごめんね。ほんとうに」

つばき、泣き出す。

望田「謝るなよ。何にも悪くないよ。つばき
は、何も悪くない」

二人、抱き合って泣く。

つばき「ヤス君。殴りとばしてよ。私の癌」

望田「う、うう」

望田、ベッドの淵を拳で殴りつける。
ギシギシとベッドが揺れる。

○元の川原（夜）

望田、泣きながらシャドーボクシング。
カラエフの左フックを繰り返し、繰り
返し夜のしじまに撃ち続けている。

○有明コロシアム・全景（夕方）

T・「フェザー級4団体統一戦 当日」
たくさんの観客がスタジアムに向かっ
ている。

沿道には、一也とカラエフの試合を宣
伝する幟が並んでいる。

○同・控室（夜）

一也、ウォームアップ。

安部がミットを構えてミット打ち。

望田と小浦、その光景を眺めている。

× × ×

試合前の円陣。

一也「よし、いこー」

一也を先頭に、小浦、安部、望田と並
んで出ていく。

小浦が1本、安部が2本のチャンピオンベルトをもって。

○同（夜）

一也、興奮した顔で戻ってくる。その手には4本のベルト。

望田、小浦、安部がつづけて入ってくる。

顔に傷一つない一也、ベンチにドカッと座る。

小浦「だから言ったら。4ラウンドでKOするって」

安部「いやあ、良かった。盤石だったね」

一也「マジで、ヤスさんのおかげです」

望田「いやいや、俺なんて」

一也「（カラエフの左フックのモーションを真似て）マジで、3ラウンド、あのフックもらってたらずバかったかも」

小浦「ほんと、ありがとなヤス」

安部「ヤス」

望田「いや、ほんと、良かったです」

試合後の控室は、最高の雰囲気。

○望田の自宅・リビング（朝）

佳次、朝の情報番組を見ている。

一也、4団体統一するも、拳を痛めた
というニュース。

○小浦ジム・全景

○同・会長室

望田、小浦の前に立っている。

望田「マジですか？」

小浦「うん。マジ」

望田「俺が？」

小浦「そう。リング上がれよ。久々に」

望田「いや、闘い方忘れちゃって」

小浦「面白いこと言うな」

望田「どうしたらいいですかね」

小浦「もちろん。ヤスが決めてくれていい」

一也、入室。

一也「やりましょうよ。ヤスさん。俺、セコンドつくよ」

望田「カズ」

一也「俺、当分、試合できないしさ」

小浦「良いコーチできたじゃんか」

一也「会長、相手選手の映像あります？」

小浦「いやいや、気が早いよ」

一也「早けりや早いほどういでしょ」

小浦「まだ、相手確定してないし、ヤスもさ」

一也「ヤスさん。とりあえず走りますか？」

望田「：うん。そうだな」

一也「世界、獲りますよ」

望田「気が早いな」

一也「当たり前でしょ。やるからには世界つ

スよ。さ、行きますよ」

望田「厳しいなあ」

一也「世界、世界」

一也、会長室を出ていく。

小浦「アイツは：まったく」

望田「会長すいません。ちょっと時間ください」

小浦「わかった」

望田「とりあえず、走ってきます」

小浦「ああ」

望田、頭を下げると部屋を出ていく。

○望田の自宅・リビング（夕方）

望田、佳次、すみれ、食事をしている。

すみれ「え？」

望田「うん。試合、しないかって」

すみれ「兄さんが？」

望田「そう。俺が」

すみれ「ヨシくん」

佳次「う、うん」

佳次は、嬉しいのだが、上手く表現できな
きない。

望田「減量とかもあるから、食事は変えてい
こうと思ってる」
すみれ「はい」

望田「すみれちゃんは、ヨシと二人分だけ作ってくれたらいいから」

すみれ「一緒に作ります」

望田「いや、大丈夫だよ」

すみれ「一緒に作らせて。私にも、応援させて。家族として」

望田「うん。そうだね。ありがとう。お願いします」

すみれ「はい。ヨシ君、良かったね」

佳次「うん」

すみれ「試合はいつ？」

望田「え？俺、やるって言った？」

すみれ「だって、減量するって。今」

望田「あ：そうか」

佳次「やってよ試合。パパ」

望田「ヨシ」

佳次「絶対やってよ」

すみれ「兄さん」

望田、つばきの遺影を見る。

佳次とすみれもつばきの遺影を見る。

○（回想）川原

望田、走っている。

つばき、その横を自転車で走りながら、
メガホンを使って発破をかける。

二人、とても楽しそう。

○元の部屋

望田、佳次、すみれ、つばきの遺影を
見ている。

望田「そうだな。やろう。試合、やろう」

佳次とすみれ、顔を見合わせて笑う。

○佳次の小学校・教室

休み時間。

佳次、一人座っていると、大彌と輪弩
が近くにくる。

輪弩「大彌、大丈夫か。顔」

大彌「ああ。いてえ。殺されるかと思ったぜ。

プロのボクサーって、簡単に人殺せるから
な」

女子A「やめなよ。そういうの」

輪弩「うるせえな」

大彌「でも、オマエのオヤジ、もうプロじゃないんだよな。ただの噛ませ犬だもんな」

輪弩「噛ませ犬」

大彌「噛ませ犬」

女子A「サイテー」

佳次、席を立つ。

ビビる大彌と輪弩。

佳次「試合、決まったから。ボクシングの試合」

え？となる同級生たち。

佳次「俺のパ：俺のオヤジはプロのボクサーだから」

わらわらと佳次の周りに集まってくる

同級生たち。

大彌と輪弩、輪の外に押し出される。

大彌「どうせ負けるよバカヤロー」

輪弩「負ける負ける」

大彌と輪弩、教室を出ていく。

佳次の周りに集まる同級生たち。

佳次、嬉しそうに話している。

○小浦ジム・リング

一也と安部が口喧嘩をしている。

一也「しょうがないだろ」

安部「わかってるよ怪我のことは」

一也「とにかく、復帰でいきなりスーパーフ

エザーは無理だよ」

安部「良い機会じゃないか。準備する時間もあるし」

一也「父さん。怪我の回復と階級上げを同時にやるのはリスクありすぎだよ」

安部「オマエは世界一のボクサーだ。なんだってできるよ」

一也「違うって今はそれは：父さんは、いつも急ぎすぎなんだよ」

安部「一也。でもな：」

一也「リングに上がったことないから、わからないんだよ」

安部「俺のこと言ってるのか？ソレ。俺だつてあるよ」

一也「ただの6回戦ボクサーだろ。俺は世界だよ。世界のリングだ」

望田、入室。

望田「おはようっス」

一也、望田に気づくとジムを飛び出していく。

望田「あ、カズ」

望田、安部と目が合う。

安部、苦笑い。

○同・リングサイド

望田と安部、リングの淵に座り話している。

安部「言われちゃったよ。ついに」

望田「何をです？」

安部「父さんに、俺の気持ちはわからないって。いつか言われるんじゃないかってビクビクしてたんだけどさ」

望田「本気じゃないですって」

安部「俺は、ただの6回戦ボーイだからな」

望田「カズを育てたのはコーさんですよ」

安部「正直、今はもう俺の子かなくてくらい、手の届かないところに行っちゃってる」

望田「コーさんが正しく指導したからでしょ」

安部「なんか、バンタムで日本チャンプ獲ったあたりからかな、距離感じはじめたの。

俺の言うこと、どんどん取り入れて、どんどん前進んでいくんだよアイツ。アイツさ、ずっとボクシングなんだよ。365日。24時間。一秒もボクシングから離れない」

望田「すごいな」

安部「正直、怖くなった。狂ってるとさえ思った。自分の子どもなのにさ、段々、一緒にいるのが息苦しくなっていたんだよ。だから今、家も別々なんだ」

望田「そうなんですか」

安部「ああ。すげえよアイツ。負ける要素を0にするために、徹底的にやる。でもさ、

やりすぎなんじゃないかって思う時があるんだ。もつとさ、ガーンといっちゃえってさ」

望田「そうなんですね」

安部「俺はただ、現役終わった時に、後悔してほしくないんだよ。あれやつときやよかったとか思っただけなんだよ」

望田「コーさん」

安部「息子に：息子で、いいんだよな？」

望田「他の表現ないでしょ」

安部「急がせちゃってるのかな。親のエゴかな」

望田「コーさん」

安部「ヤスも将来、こんな気持ちになるんだぞ」

望田「俺も？」

安部「ヨシ。ボクシングやらせるんだろ」

望田「…」

安部「ヨシは、才能あるよ。絶対」

望田「コーさん」

安部「ん？」

望田「俺、誰かに話すの初めてなんスけど」

○（回想）つばきの病院

ベッドで寝ているつばき。

その横に座る望田。

望田、つばきの手を握っている。

つばき「ヨシには、ボクシング、やってほしくないな」

望田「つばき」

つばき「もし、天国とか、あの世とかあつてね：あつたとして」

望田「：」

つばき「息子が殴られるのも、殴るのもみたくないかも」

望田「：」

つばき「だって、殴られて、痛い痛いってヨシが言ってる時に、もう、私、ヨシに触れることできなくなっちゃうんだもん。そんなの：ヤだよ」

望田「わかった。わかった。約束する。ヨシにはボクシングやらせない」

つばき「（笑う）」

望田「約束する。アイツには、絶対ボクシングはやらせない」

望田、つばきの手を強く握る。

つばき「ちよつと…痛いかも」

望田、つばきの手を拝むように掴む。

つばき、笑う。

○元のリングサイド

望田と安部、並んで座っている。

安部「そっか。そんなことが」

望田「だから、やらせません。やらさられないですよ」

安部「ヨシには、話したのか？ソレ」

望田「…」

安部「ヨシは、やりたいんだろ？ボクシング」

望田「はい」

安部「ヨシに、つばきちゃんとの約束の話は

しろよ。してやれ」

望田「俺：アイツには、アイツには」

望田、泣き出す。

望田「つばきが、母親が死ぬかもしれないつてことも言えなかったんです」

安部「ヤス」

望田「俺、父親失格です」

安部「あんまり自分を責めるな。責めるなつて」

望田「ヨシは、最後の最後まで信じてたんです。母親が、また元気になるって。俺が言わなかったから。言えなかったから」

安部「ヤス」

望田「ヨシを止める権利なんて、本当は俺にはないんです」

安部「それは違うよヤス。オマエは生きてる。ヨシと一緒に生きてる。だから、責任を果たさないといけない。ヨシを守るんだ。一緒に生きるんだ」

望田「コーさん」

安部「俺みたいに、嫌われちゃってもさ、言わないといけないことは言わないとダメだ。それが家族ってもんだろ」

望田「はい。はい」

安部「ヨシにボクシングやらせるかどうか、それはオマエしか決められない。でもな、俺たちは生きてる。苦しいけど、生きてる。ヨシもだ。アイツだってそうだ」

望田「…」

安部「俺、わけわからんこと言ってるな」

望田「いえ、そんなことはないです」

小浦、入室。

小浦「おはよー」

望田、涙を拭く。

望田「おはようございます」

安部「おはようございます」

小浦「なんだよ。楽しそうだな。俺も混ぜてくれよ」

安部「会長、すいません。カズ、怒らせちゃった」

小浦「気にしない気にしない」

安部「もし、カズがジム辞めるって言ったら

：どうでしょうか？」

小浦「また別のチャンピオン育てりゃいいよ。

だから辞めないでよコーさんは」

安部「お、俺ですか？」

小浦「そうだよ。育てるよ俺たちで。ヤスも、

頼むぞ」

望田「はい」

3人、向かいあって笑いあう。

○川原

望田が走っている。

その横を自転車で並走するすみれ。

佳次、望田の後ろを走っている。

望田、時折、気にして振り返る。

佳次、必死についてくる。

望田と目が合うと笑顔になる佳次。

○（回想）つばきが入院している病院の廊下

望田の後ろを歩く望田佳次（9）。

望田、不安そうに病室を見つめる。ついに足が止まる。

振り返ると佳次が笑顔。

佳次「ママに早く会おうよ」

望田「ああ。うん。そうだな」

佳次、笑顔で望田を追い越していく。

○元の川原

走っている佳次、望田を追い越す。

望田「おい。あんまりペースあげるな」

佳次「大丈夫。大丈夫」

佳次、嬉しそうに笑っている。

すみれ、自転車に乗りながら嬉しそうに笑う。

○小浦ジム・リング

望田、安部を相手にミット打ち。

リングサイドに一也と小浦。

一也の隣には佳次。

一也「踏み込み、踏み込み」

望田、踏み込んでワンツ―を撃つ。

一也「そう。強く。前の足強く踏み込んで」

佳次、目を輝かせてリングを見ている。

× × ×

練習終わり。

望田、シャワールームへ消えていく。

一也、佳次に目配せして、

一也「ヨシ。あがれ」

佳次「でも」

一也「いいからいいから」

一也、佳次をリングの中に入れる。

× × ×

佳次、一也を相手にミット打ち。

その光景をリングサイドから見る安部

と小浦。

一也「良いぞ。ヨシ、良いぞ」

佳次「うん」

一也「ほら、ワンツ―。ワンツ―」

佳次、一也のはめたミットにパンチを

打ち込む。

佳次「良いよ。良いストレートだ」

リングサイドにいる安部と小浦。

小浦「なんか、昔、思い出さない？」

安部「思い出すね。カズもあんな感じだった」

小浦「足の使い方上手いな。ヨシは」

安部「うん。良い。あの頃のカズより全然上」

望田、シャワールームから出てくる。

あ、となる佳次。手を止める。

一也も望田に気づく。

一也「ヤスさん。やっぱ、才能あるよヨシ」

望田「そうか」

一也「よし。今日は終わりだ。またやろうな

ヨシ」

ヨシ、うつむく。

安部、気づかわし気な視線を望田に送る。

○家までの帰り道

望田の自転車の後ろに乗る佳次。

佳次「パパ、ごめんなさい」

望田「何の話だ？」

佳次「さつき。リング」

望田「…ああ」

佳次「もうジム、行っちゃダメ？」

望田「…良いよ。行こう」

佳次「うん。うん」

佳次、嬉しそうに望田の腰に組み付く。

○川原

雨。

望田、一人で走っている。

○小浦ジム・リング

外は雨。

望田、安部を相手にミット打ち。

○同・会長室

望田、小浦、安部、一也と共に対戦相手の試合映像を見ている。

○同・リング（夜）

室内には誰もいない。真っ暗な室内。

望田、一人リングの上に立つ。シャドーをはじめめる。

目の前に、前シーンの対戦相手の幻影。

歓声が沸く。

幻影が襲い掛かってくる。

望田、足が震える。パンチが打てない。

対戦相手のパンチが目の前に。

望田「うわっ」

望田、尻餅をついてしまう。

小浦、会長室から現れる。

小浦「どうした？ヤス」

望田「いえ…」

小浦「試合、近いからな。怪我だけは、頼む

ぞ」

望田「はい。わかっています」

○佳次の学校・会議室

廊下に、【三者面談会場】とある。

ドアを開けて出てくる望田と佳次。

望田「じゃあ、正門で待ってるから」

佳次「うん」

○同・佳次の教室

佳次、帰りの支度をしている。

大彌と輪弩、近づいてくる。

大彌「オヤジ、負けるぞ」

輪弩「負けるぞ絶対」

大彌「噛ませ犬だからな」

佳次「パパは弱くない」

大彌「オマエも弱虫なんだろ」

輪弩「弱虫の子は弱虫だよ」

佳次「ぼくは弱虫じゃない」

大彌「じゃあ、根性見せてみるよ」

輪弩「根性見せろ」

大彌「ベランダからジャンプしてみろよ」

輪弩「ジャンプしてみろ」

○同・ベランダ

3階である。

○同・教室

佳次、何の迷いもなくベランダに出る。

大彌「あ、おい」

佳次、ベランダの柵を上り、思い切りジャンプする。

○同・3～1階

佳次、落下していく。

まもなく地面にたたきつけられそうなところで、望田、佳次をキャッチ。

佳次「パパ」

望田「大丈夫か。ヨシ。あ、いててて」

女子生徒たちの悲鳴。

遠くから救急車の音。

○病院・病室（夜）

ベッドの上にいる望田。右腕をギブスで固定している。

そばの椅子に座る佳次は泣いている。

望田「もう泣くな。泣くなって」

佳次「でも、ぼくのせいでぼくのせいで」

望田「ヨシのせいじゃない」

佳次「試合、できなくなっちゃった」

望田「良いんだ。良いんだ」

佳次「でも、でも」

望田「良いんだ」

佳次「ごめんなさい」

望田「もう泣くなって」

佳次の背中に優しく左手で振れる望田。

望田、佳次の背中を撫でる。

望田「ごめんな。パパは、ヨシが思ってるよ
うな強い人間じゃないんだ」

佳次「…」

望田「パパ、正直、ホッとしたんだ。試合が
できなくなってる」

佳次「え？」

望田「カッコ悪いだろ。でも、ほんとなんだ。

パパは、闘うのが怖かったんだよ」

佳次「…」

望田「ごめんな。こんな父親で」

佳次「…」

望田「それからもう一つ、オマエに謝りたいことがある。ずっと言えなかったことだ」

佳次「…」

望田「ママのことだ。ママが病気の時、パパ、ママが死んじゃうこと知ってた。でも、オマエに、言ってやれなかった。ずっと信じてたよな。ずっと、ママとまた暮らせるって」

佳次「…」

望田「俺が弱いせいで、弱いせいで、言ってやれなかった。ごめん。本当にごめん」

望田、泣き出してしまふ。

佳次、父親が泣いている姿を見る。

望田「すまない。本当にすまない」

佳次、笑顔になると望田の背中をさすり、

佳次「パパは、カッコ悪くないよ。カッコ悪

くない」

望田「…」

佳次「パパ、一生懸命やってたもん」

○（回想）すみれの病院・ベッド

ベッドの上にいるすみれを甲斐甲斐し

く世話する望田。

その姿を見ている佳次。

○（回想２）小浦ジム・リング

一也とスパーリングをする望田。

その光景を見ている佳次。

○（回想３）川原

望田、ダッシュをする。

その光景を見ている佳次。

○元の病院（夜）

佳次、望田の背中をさすりながら、

佳次「パパは、いつも全力だから。すごくカ

ツコ良いよ」

望田「ヨシ」

望田、佳次を抱き寄せる。

望田「すまない。本当にすまない」

佳次「ありがとうパパ。ありがとう」

○（回想）つばきの病院

ベッドで寝ているつばき。

その横に座る望田。

望田、つばきの手を握っている。

望田「約束する。ヨシにはボクシングやらせない」

つばき、安心したように笑う。

望田（声）「ヨシ、ボクシング。やれ。やっていい」

○元の病院（夜）

佳次、嬉しそうに笑う。

佳次「ほんと？」

望田「ああ。良いよ」

佳次「やった。やった」

望田「うん」

佳次「パパがコーチやつてくれる？」

望田「カズがやつてくれるってさ」

佳次「やだよ。パパが良いよ」

望田「アイツ、世界チャンピオンだぞ」

佳次「パパが良い」

望田「ヨシ」

佳次「ぼく、パパが良いんだ」

すみれ、二人のやり取りを入口で聞き、
泣いている。

佳次、すみれに駆け寄っていき、

佳次「すみれちゃん。やったやった。パパが
ボクシングやっついていいって」

望田、窓の外を見て、

望田「ごめん。つばき。俺、約束守れなかつ
たよ」

病室に大彌と輪弩が現れる。後ろには

二人の保護者。

大彌と輪弩、泣きながら謝る。

望田、笑顔を浮かべて迎え入れる。

○小浦ジム・リング

望田と佳次、練習をしている。

縄跳び。

望田「よし。まずは基本から」

佳次「うん」

一也、羨ましそうに二人を見ている。

一也「ヨシ。いいのか？俺じゃなくて」

佳次「パパがいいの」

一也「4団体統一の世界チャンピオンだけど」

佳次「いいの。パパが」

一也「来年にはスーパーフエザー行くけど」

佳次「いいの」

望田「縄跳びの飛び方はな」

佳次「うん。うん」

一也「おい。ヨシい」

すみれ、二人を撮影している。

小浦、会長室からテレビ局が使うよう

なカメラをもってきて撮影をはじめ。

安部、小浦の隣に来て、

安部「やりすぎでしょ」

小浦「未来の世界チャンプのスタートだぞ」

安部「確かに」

佳次、ぴよんぴよんと縄跳びを飛ぶ。

安部「すげえ運動神経」

小浦「楽しみだなあ」

望田「よし。良いテンポだ。良いよ」

佳次「うん。うん」

佳次、望田たちが見守る中、鏡の前で縄跳びをしている。

○望田家・リビング

つばきの遺影。

一凛の花が花瓶に挿してある。

望田（声）「つばき。約束する。ヨシのことは、

俺が絶対守るから。だから、俺たち家族のこと、ずっと天国から見守っていてくれ」

（了）